

第三章 シビックで朝まで

東野圭吾

2021年12月11日

1

改札口かいさつぐちを出て腕時計うでどけいを見ると、二本の針にほん はりは午後8時半を少し過ぎたところを指していた。おかしいなと思い、周囲しゅういを見回した。案の定あん じょう、時刻表じこくひょうの上に取り付けられた時計は、八時四十五分を示している。浪矢貴之たかゆきは口元くちがを歪め、舌打ちした。オンボロ時計め、また狂くるってやがる。

大学の合格祝ごうかくいで父親ふいかもらった時計は、最近になって不意に止まることが多くなった。20年も使っていれば当然か。そろそろクォーツに買い替えようかなと考えた。水晶発振方式すいしょう はっしんの画期的な時計は、かつては軽自動車並みの値段ながしたが、最近では急速に低価格化かかくしている。

駅を出て、商店街を歩いた。この時間になっても、まだ開いている店があることに驚いた。外から覗のぞいた限りでは、どの店もなかなか繁盛はんじょうしているらしい。ニュータウンができて新しい住人じゅうにんが増え、駅前商店街の需要じゅうようが高まった、と聞いたことがある。

こんな地方の、ぱっとしない街がねえ、と貴之は意外に思うが、生まれ育った土地^{とち}に活気^{かつき}が戻っているという話を聞いて悪い気はしない。それどころか、せめてうちの店もこの商店街の中にあったならな、などと考えてしまう。

商店街^{なら}の並ぶ通りから脇道^{わきみち}に入り、しばらくまっすぐ歩いた。すぐに住宅^たの建ち並ぶエリアに入った。この辺りは来るたびに景色^{けしき}が少しずつ変わる。新しい家が次々^{つぎつぎ}と建っていくからだ。それらの住人^{じゅうにん}の中には、ここから東京まで通勤している者も珍しくないという。特急電車を使っても、二時間はかかるだろう。自分にはとてもできない、と貴之は思った。彼の現在の住まいは都内の賃貸^{ちんたい}マンションだ。狭いながらも2LDKで、妻と十歳の息子と三人で暮らしている。

しかし、と思い直した。ここから通うのは無理だが、立地条件^{りっち じょうけん}について、ある程度は妥協^{だきょう}する必要はあるかもしれない。人生は、自分の思う通りにならないことの方が多い。通勤時間が延びるぐらいのことは我慢すべきだろう。

住宅地を抜けると、T字路^{じ ろ}に出た。右折^{うせつ}し、さらに歩いていく。緩やかな上り坂だ。この辺りなら、目を瞑^{つむ}っていても歩ける。どれだけ歩けば、道がどの程度に曲^まがっていくか、体が覚えている。何しろ、高校を卒業するまで通った道だ。

やがて右前方に小さな建物が見えてきた。街灯^{がいとう}は点^{とも}っているが、看板^{かんばん}の字は煤^{すす}けていて読みにくい。シャッターは閉^しまっていた。

店の前で足を止め、改めて看板を見上げた。ナミヤ雑貨店—近づ^{ちか}けば辛^{かろ}うじて読める。

隣の倉庫そうことの間に、幅一メートルほどの通路つうろがある。貴之は、そこから店の裏側に回った。小学生の頃は、ここに自転車を止めていた。

店の裏には勝手口かってぐちがあった。ドアのすぐ横に牛乳箱が取り付けられている。牛乳を配達してもらっていたのは、十年ほど前までだ。母親が亡くなって、しばらくしてからやめた。しかし牛乳箱はそのままだ。

牛乳箱の脇わきにはボタンが付いている。押せば、昔はブザーなが鳴った。今は鳴らない。

貴之はドアノブを引いた。やはり抵抗なく開いた。いつもこうだ。

靴脱ぎくつぬには、見慣れたサンダルと、古びた革靴ふるかわぐつが並んでいた。どちらも所有者しゅゆうしゃは同じだ。

今晚は、と低く声をかけた。返事はなかったが、構わずに進んだ。靴を脱ぎ、上がり込んだ。入ってすぐのところが台所だいどころだ。その先には和室があり、さらにその向こうが店舗てんぽになっている。

雄治は和室で卓袱台ちゃぶだいに向かっていた。股引ももひきにセーターという出で立ちで、正座せいざをしている。そのまま顔だけをゆっくりと貴之の方に向けた。老眼鏡ろうがんきょうを鼻先にずらしている。

「何だ、おまえか」

「何だ、じゃないよ。鍵かぎがかかってなかったぞ。戸締りとじはきちんとしろって、いつもいっているだろ」

「何か聞こえてたが、考え事をしてたので、返事をするのが面倒だったんだ。」

「また、そういう負け惜しみを」 貴之は持参してきた小さな紙袋かみぶくろを卓袱台ちゃぶだいに置き、胡座あぐらをかいた。「ほら、親父の好きな木村屋のあんぱん

だ」

おう、と雄治は目を輝かせた。^{かがや}「いつもすまん」

「別にいいよ、これぐらい」

雄治は、どっこいしょと立ち上がり、紙袋をつまみ上げた。すぐそばの仏壇は扉が開いたままだ。そこの台にあんぱんの入った袋を置くと、立ったままで鈴を二度鳴らし、元の場所に座った。^{こがら}小柄で^や痩せているが、八十歳近くになっても姿勢だけは良い。

「お前、晩飯^{ばんめし}は食べたのか」

「会社の帰りに蕎麦^{そば}を食った。今夜はこっちに泊まるから」

「ふうん。芙美子^{ふみこ}さんにはいつてあるのか」

「ああ。あいつも親父のことを心配してたぜ。体調はどうなんだ」

「お陰様で問題ない。わざわざ様子を見にきてもらうまでもない」

「せっかく来てやったのに、その言い方はないだろ」

「心配無用と言ってるだけだ。ああそうだ、さっき風呂^{ふろ}に入って、湯はそのままにしてある。まだ冷めてないだろうから、好きな時に入れればいい」

会話の間中、雄治の視線は卓袱台の上に向けられていた。そこには便箋^{びんせん}が広げられている。傍らに封筒^{かたわ}が置いてあった。表書きは、ナミヤ雑貨店様へ、となっている。

「それ、今夜来たのか」 貴之は訊いた。

「いや、届いたのは昨日の深夜だ。朝になって、気づいた」

「それなら、今朝、回答しなきゃいけなかったんじゃないのか」

『ナミヤ雑貨店』への悩み相談の回答は、翌朝^{よくあさ}牛乳箱に入れられる

—それが雄治の作ったルールのはずだ。そのため雄治は午前五時半には起きる。

「いや、夜中だ^{やちゆう}ということで相談者も気を遣^{つか}ったらしい。回答は一日遅れでいいと書いてある」

「ふうん、そうなのか」

おかしい話だ、と貴之は思った。なぜ雑貨屋^{てんしゆ}の店主が、他人の悩み相談に応じねばならないのか。もちろん、こうなってしまった経緯はわかっている。何しろ、週刊誌^{しゆざい}が取材に来たほどなのだ。あの直後は相談件数が増えた。真面目な内容もあったが、多くがふざけたものだった。明らかに嫌^{いや}がらせと思われるものも少なくなかった。極めつけは一晩で三十通以上の悩みが持ち込まれたことだ。明らかに一人の手によるものだった。内容は全てでたらめなものだった。ところが雄治は、それらにさえも回答をしようとした。さすがにその時には、「やめろよ、そんなこと」と貴之は雄治にいった。